

与謝野鉄幹と漢詩 初稿

与謝野鉄幹は、明治・大正・昭和の三代を生きた歌人であり、妻晶子とともに「明星」その他の和歌の雑誌の主宰者また編集者としての名はあまりにもよく知られている。

鉄幹は明治六年（一八七三）に、現在の京都市左京区岡崎にあった願成寺の四男として生まれ、父の礼巖も歌人であった。晶子は五年後の明治十一年（一九三五）に、大阪堺の菓子商駿河屋の三女として生まれた。二人の結婚にはいろいろと紆余曲折があったが、明治三十三年（一九〇〇）八月に大阪で初めての出会いの後、翌年の三十四年（一九〇一）に結婚をし、昭和十年（一九三五）三月に鉄幹が六十二歳で亡くなるまで三十年以上にわたって生活を共にした。晶子は鉄幹死去の七年後の昭和十七年（一九四二）に六十四歳で亡くなっている。仕事上も実生活上もすべてがいっしょであり、車の両輪のごとくどちらが欠けても成立しないライフスタイルであったといえよう。残された仕事上の功績は枚挙に遑がないほどだが、二人の間には十二人の子どもが生まれており、五男六女の十一人が無事に育っている。現在も末女の藤子さんはご高齢だが今もおご存命であると聞く。

さて両者の作品は主として和歌であることは今さら言うまでもないことだが、他に詩・随筆・評論などもあり、鉄幹には「日本語源考」などの論文・著作もあり、その活動は多岐にわたっている。代表的な和歌にしても、生涯の間に詠んだ作品の数は何万首もあり、今もなお

与謝野鉄幹と漢詩 初稿

西村 富美子

新しい作品が草稿、書簡などの形ですくなくらず発見されている。これからもこの状況は当分の間続くのではないだろうか。

両者の作品のなかで、いまだ明らかにされていないのは、漢詩の部分であり、晶子は漢詩を作っていないのは確かなことなので、鉄幹のみの仕事上の成果ということになる。

筆者はふとしたきっかけから鉄幹の漢詩に興味を抱き、周辺の与謝野鉄幹、また近代文学の研究者に教示を乞うたのだが、和歌の先行する鉄幹の研究は晶子とともに研究の対象ではあるものの、鉄幹だけを切り離して、ましてや「漢字」の集合体である漢詩などは、研究の対象どころか興味の対象としても浮上して来ないというのが、不明確な回答であり真相のようであった。

○

実にさまざまな伝^{つた}を求めて、鉄幹の漢詩に関する資料、情報を収集した結果、現在も資料の調査は終了していないが、鉄幹の漢詩の世界、またルーツ、決して表面には出さなかったが鉄幹の漢詩制作に対するこだわり、執念ともいえるべき思いが多少見えてきたところがあるので、少し鉄幹の漢詩のジャンルの解明を試みてみようと考えているに至った。

本稿では、まず十代の作品を第一期、五十代以降を第二期と位置づけ、第一期の作品、第二期の作品を、それらが属する作品集の中から各期の最初と最後の作品を何首か挙げて、形式的な特徴を簡単に述べ

ておきたい。

とりあげるのは、『海内詩媒』、『明星』第二次、『満蒙遊草』、『冬柏』の四種の漢詩集、また主宰する雑誌などであり、これ以外に見える鉄幹の漢詩については、次回に譲ることにしたい。

●『海内詩媒』

総数五十六首の詩を投稿している。明治十七年（一八八四）十一月（二十九集）が最初で、鉄幹は十一歳であったが、以後明治二十二年（二八八九）四月（百三十四集）まで、約六年にわたりほとんど毎号投稿を続けている。当時の鉄幹は、明治十七年には、大阪の安養寺（住吉区遠里小野）の養子となり、漢学・英語・仏典等を勉強していたが、明治二十年四月には、岡山の安住院に行き中学の予備門に入っており、二十一年に岡山中学を受験するが及第せず、十一月に京都にもどっている。大阪→岡山→京都の三つの土地を転々としながら、詩作を続けていたのである。

五十六首の詩の中で、大阪での作は三十五首、岡山での作が十四首、京都での作が七首である。また大阪での作には、最後の一首を除き「澄軒逸史」「澄軒小柄」「澄軒小裡」等の号を用いている。三十集所収の「晩節」の詩は「墨仙々史」を用い、最後の百三十四集の「瓶井山雑詠」の詩には理由は分からないが「鉄雷道人」を用いている。岡山と京都の合わせて二十一首には、「鉄（鉄）雷道人」の号を用い、「安藤寛撰津の人寓備前（岡山）」また「安藤寛西京一乗寺人」と併記している。詩型は五言絶句が五首、七言絶句が二十七首、五言律詩が十一首、七言律詩が八首、五言古詩が一首、七言古詩が三首であり、七言絶句が最も多く次いで五言律詩が多い。

① 秋江晩望

一行雁影海天秋 秋江の晩望 澄軒逸史 安藤寛
 水色濛々山似浮 一行の雁影 海天の秋
 曉瞭遙聽漁笛響 水色濛々 山 浮くが似し
 曉瞭 遙かに聴く 漁笛の響き

蘆花州外認孤舟 芦花州外に孤舟を認む

② 晩節

村々都栽菊 晩節 墨仙々史 安藤寛
 何處是陶家 村々 都て菊を栽う
 過了重陽節 何れの処かはれ陶家ならん
 僧園猶看花 重陽の節を過ぐるも
 猶お花を看る 僧園

③ 瓶井山雑詠之一

東林西林鶯識雨 東林西林 鶯 雨を識り
 前岸後岸柳縹風 前岸後岸 柳 風を縹る
 禪房埋在桃花裡 禪房 埋もれて桃花の裡に在り
 朝暮報鐘餘響紅 朝暮の報鐘 余響紅なり

④ 瓶井山雑詠之二

溪流如擊鼓 溪流 擊鼓の如し
 松籟似彈琴 松籟 彈琴に似たり
 惡喧更不聽 惡喧 更に聴かず
 々唯天地音 聴くは唯天地の音のみ

※① 第二十九集（明治十七年十一月（一八八四）・十一歳）

② 第三十集（明治十七年十二月（一八八四）・十一歳）

③ 第三十集（明治二十年（一八八九）・十六歳）

④ 第三十四集（明治二十二年（一八九一）・十六歳）

鉄幹は、『海内詩媒』第百三十四集に投稿した「瓶井山雑詠之一」から、三十五年間ほどは和歌の制作に専念した時期が続いており、明治三十三年から発刊した『明星』には、漢詩を全く載せていない。

●『明星』第二次

漢詩の制作を再開したのは、『明星』復刊後の大正十二年（一九二二）以後と思われ、その作品は『明星』第二次の「第六卷第三号」

(大正十四年三月号)に久々に登場する。次いで「第七卷第三号」(九月号)に、「采花莊雜詩」として、それぞれ十七首、四首の漢詩を掲載している。さらに「第九卷第三号」(大正十五年十月号)および「第十卷第二号」(昭和二年四月号)に、「遙青書屋雜詩」として、それぞれ九首、十九首の詩を載せている。これらの「采花莊雜詩」及び「遙青書屋雜詩」の漢詩群は、『明星』第二次のなかで「雜俎」の項に載せられており、この年の九月に『明星』第二次は終刊となるが、総数四十九首の漢詩を収めている。

四十九首の詩の詩型は、五言絶句の連作の詩が多いために十八首、七言絶句が十二首、「第九卷第三号」の九首がすべて五言律詩のため十三首、七言律詩が三首、五言古詩が三首である。

① 發(癸) 亥晚秋與羅馬尼駐割公使堀口父子飲、長城有詩、次其韻却酬、三首 (一)

發(癸) 亥晚秋、羅馬尼駐割公使の堀口父子と飲む。長城に詩有り、其の韻に次し却酬す。三首 (一)

官場迨暇共吟筵 官場 暇に迫んで 共に筵に吟ず
公使風流誰比肩 公使の風流 誰か肩を比べん
更喜君家公子在 更に喜ばしきは君が家に公子の在りて
龍蛇百變作長篇 龍蛇 百變して 長篇を作すを

② (一)

新歡如醋舊歡醇 新歡は醋すくの如く 旧歡は醇あつ
昨是今非五十春 昨は是にして今は非なり 五十の春
遊俠誰憐漢陽客 遊俠 誰か憐れむ 漢陽の客
如今斑白講書人 如今 斑白 講書の人

③ (三)

偶會故人尋舊歡 偶たま故人に会いて 旧歡を尋む
災餘秋夕倍新寒 災余の秋夕 新寒を倍す
陶然且假醉中夢 陶然として且つ醉中の夢を仮りて

与謝野鉄幹と漢詩 初稿

欲學圖南萬里搏 図南万里を搏つを學ばんと欲す

※なお①・②には鉄幹の自注がある。

①長城の長子の大学、国詩を善くす、長篇縦横にして、夙に盛名有り。②予長城と始めて朝鮮の京城に于いて相識る。実に三十年前の事に属す。

④ 録昨年中秋作 昨年の中秋の作を録す

又遇中秋節 又 中秋節に遇い

欲成良夜吟 良夜の吟を成さんと欲す

野天雲散去 野天 雲 散じ去り

書屋月來臨 書屋 月 来たり臨む

遙樹黑於墨 遙樹 墨よりも黒く

前川明似金 前川 金の似く明なり

憾因市門遠 市門の遠きに因って

不與故人斟 故人の斟に与せざるを憾む

※①②③ 雜俎：「采花莊雜詩」(第六卷・第三號所載)

④ 雜俎：「遙青書屋雜詩」(第十卷・第二號所載)

①②③ 大正十四年(一九二五)三月。五十二歳

④ 昭和二年(一九二七)四月。五十四歳

●『滿蒙遊記』

昭和二年の九月に『明星』第二次を終刊し、翌年の昭和三年に鉄幹は晶子とともに南滿州鉄道の招きを受けて中国旅行に出かけている。五月五日に東京を出発し、九日に大連に到着、遼寧・吉林・黒竜江の東北三省を約三十五日間かけて旅をする。帰りは六月十二日に大連を発ち帰国の途についている。中国各地で見た風景、また感慨を和歌と共に漢詩に詠んで、二年後の昭和五年五月に『滿蒙遊記』を刊行し、それらの作品を収めている。その内容は、旅行記・和歌(鉄幹・晶子)・漢詩の部(『滿蒙遊草』)の三部構成となっており、中国旅行中に作った漢詩三十七首を、師の吉田学軒の校閲を経たものを載せている。

与謝野鉄幹と漢詩 初稿

「満蒙遊草」には五言絶句は見えず、七言絶句が十一首、五言律詩が九首、七言律詩が七首、五言古詩が六首、七言古詩が二首、賦が一首、七言六句がそれぞれ一首ずつであり、詩の形式が多種に及んでいる。筆者は七言絶句および古詩の形式に評価すべき佳作があるように感じる。

① 戊辰暮春、將伴内子遊滿州蒙古及北京、與諸友飲、三首（一）

戊辰の暮春、將に内子を伴ないて滿州蒙古及び北京に遊ばんと
して、諸友と飲す 三首（一）

（第一首目）

臨別姑同醉 別れに臨んで 姑く共に酔う

京華三月樓 京華 三月の樓

文章期晚節 文章は晩節を期し

家國足深憂 家國は深憂足る

幾作四方客 幾たびか 四方に客と作るも

復登千里舟 復た 千里の舟に登る

諸賢多勤勉 諸賢 勤勉多く

何以答風猷 何を以て風猷に答えん

② 再過旅順

再び旅順を過ぎる

（第三十七首目）

人間好戰古今然 人間 戰を好むこと 古今然り

旅順口頭萬感牽 旅順の口頭 万感牽かる

潮激雷威猶礮響 潮激 雷威 猶お礮響のごとく

雲餘沴氣尚彈煙 雲は沴氣を余し 彈煙尚し

骨枯有塔催新淚 骨枯れて塔有り 新たに涙を催す

崖裂無山存舊肩 崖は裂けて山無く 旧肩を存す

寂寞黃金臺下路 寂寞たり 黄金台下の路

胡藤花白畫聽鶯 胡藤の花白く 昼に鶯を聴く

※①・② 「満蒙遊草」所収の作はすべて昭和三年（一九二八。五十

五歳）の作だが、吉田学軒の校閲を経て後の出版なので、昭和五年

（一九三〇。五十七歳）定稿と考えるべきであろう。

●『冬柏』

与謝野夫妻の中国旅行記『満蒙遊記』が刊行された昭和五年五月の二ヶ月前に雑誌『冬柏』を創刊し、鉄幹は『明星』第二次に次いで漢詩の作品を載せ始めている。ただ作品の掲載の仕方、また所収の詩の数に大きく異なるものがある。主な編集者が弟子の平野万里の手にゆだねられていたことも関係しているかと思われるが、いわゆる埋め草と言われるページの余白を埋める形で、第五巻・第六巻にわたって、十回、計二十首の詩を載せるが、鉄幹の最晩年の漢詩の作品と言える。

最初の詩は、第五巻第一号（昭和八年十二月）に見えており、鉄幹六十歳の作である。最後の詩は、第六巻第三号（昭和十年二月）で、鉄幹の死の前月であり、六十二歳であった。詩の形式は、五言絶句は無く、七言絶句が七首、五言律詩が七首、七言律詩が三首、五言古詩が三首であり、七言絶句と五言律詩が多いのは『海内詩媒』や『満蒙遊草』と同じ傾向である。

① 冬柏山房小集席上作

冬柏山房小集の席上の作

冬柏萬山花自紅 冬柏万山 花自ら紅なり

一溪深處訪詩翁 一溪深き処に詩翁を訪う

徑迴崖腹行望海 徑は崖腹を廻り 行きて海を望み

亭占林梢坐聽風 亭は林梢を占め 坐して風を聴く

春月照軒姑代燭 春月は軒を照らして 姑く燭に代わり

主人煎茗不須僮 主人は茗を煎じるに 僮を須いず

句成唱和怡然笑 句成り唱和して 怡然として笑い

聲在歸雲搖曳中 声は帰雲揺曳の中に在り

② 二月五日雪後作

二月五日、雪の後に作あり

天晴暖生閣 天晴れて 暖 閣に生じ

獨坐氣悠哉 獨坐 氣 悠なるかな

籬落猶殘雪 籬落 猶お残雪あるも

庭除・早梅 庭除 既に早梅あり

誰憐耽古學 誰か古學に耽るを憐れみ

何耐伍群才 何ぞ伍群の才に耐えん

知己唯春色 知己は 唯春色の

陳編堆裏來 陳編の堆裏に來るのみ

③ 遙青書屋雜詩 遙青書屋雜詩

世間爭得失 世間 得失を爭い

不若守清貧 清貧を守るに若かず

對此寒梅笑 此に對して 寒梅笑い

逃彼俗士嘖 彼を逃れて俗士嘖る

空名何爲者 空名 何爲る者ぞ

達道幾多人 達道 幾多の人あらん

凭几悠然老 几に凭れ悠然として老ゆるに

書中自有春 書中 自ずから春あり

① 第五卷第一号所載。(昭和八年(一九三三)十二月。六十歳)

② 第六卷第三号所載。(昭和十年(一九三五)二月。六十二歳)

鉄幹の漢詩の制作は十一歳に始まり、十六歳で一旦中断する。この六年間の作品は『海内詩媒』に五十六首が見え、鉄幹の漢詩制作の第一期というべきであろう。

三十五年ほど後に漢詩の制作は再開される。五十歳ごろと思われ五十四歳までの四五年間の作品は『明星』第二次に見えている。次に昭和三年(五十五歳)の中国旅行の産物、「滿蒙遊草」があり、昭和五年(五十七歳)に刊行する。次いで三年後の昭和八年十二月(六十歳)から二年ほど、死の前月(六十二歳)までの作品を『冬柏』に連載している。この三時期はまとめて鉄幹の漢詩制作の第二期と呼ぶことが

できよう。この第二期の作品の数は百六首をかぞえる。

○ 今回の稿には、『海内詩媒』、『明星』第二次、「滿蒙遊草」、「冬柏」を挙げ、それぞれの「集」から最初と最後に位置する作品を選んでみた。ただ以上挙げた四種の「集」に鉄幹の漢詩が見えることを知るのがまず難事であった。断片的ではあるが、各方面の方々からの情報や資料提供などの好意に恵まれて、何とか前方に光が見えて来た段階である。今回の詩の総数は一六〇首ほどであるが、和歌とは比べられないにしても漢詩も少しずつ新しい資料が出始めており、筆者も今回は挙げなかったものが約十首あり、次稿からはその作品も含めて対象とし、鉄幹の漢詩の内容の解説と評価を試みることにによって、鉄幹の漢詩の世界の解明に歩を進めてみたいと考えている。

【参考文献】

◎日柳三舟編『海内詩媒』(日本近代文学館蔵。但し欠巻あり)

◎『明星』(復刻版)一九〇〇年〜一九〇八年 臨川書店 一九八〇年四月

◎『明星』第二次(復刻版)一九二一年〜一九二七年 臨川書店 一九八〇年十月

◎『冬柏』一九三〇年〜一九五二年 冬柏発行所

◎与謝野鉄幹・晶子合著『滿蒙遊記』 大阪屋號書店 昭和五年五月

(塚市立図書館蔵)

◎広田栄太郎『鉄幹と『海内詩媒』―解説と資料―」

第三号 昭和四十七年三月 「大妻国文」

◎与謝野光編『与謝野寛年譜』 明治書院 昭和一〇年五月

◎逸見久美『評伝・与謝野鉄幹晶子』 八木書店 昭和五〇年四月

◎永岡健右『与謝野鉄幹伝』―東京新詩社成立まで― 桜楓社 一九

八八年三月

与謝野鉄幹と漢詩 初稿

- ◎逸見久美編『与謝野寛・晶子書簡集成』四卷 勉誠社 二〇〇二年十月～二〇〇三年七月
- ◎矢野峰人『鉄幹・晶子とその時代』(弥生選書) 弥生書房 昭和四八年八月
- ◎奥野信太郎『与謝野先生の漢詩』 「群像」十一卷十号 昭和三十一年一〇月
- ◎三浦叶『「明星」・鉄幹(寛)・晶子と漢文学』 「就実語文」十三号 一九九二年
- ◎冲良機「与謝野夫妻の旅を求めて 第十五回」 与謝野晶子倶楽部機関誌第一六号
- ◎冲良機「与謝野夫妻の旅を求めて 第十六回」 与謝野晶子倶楽部機関誌第一七号
- ◎西村富美子「漢詩随想―与謝野鉄幹の漢詩(一)―」一三六～一四五 書道研究「天真」第十二卷七月号～第十三卷四月号
- ◎西村富美子「与謝野鉄幹・晶子の満州の旅」 堺女性大学教養講座二〇〇七年一月二〇日
- ◎堺市立文化館・与謝野晶子文芸館・森下明穂 特別展・没後七〇年記念・パンフレット「与謝野鉄幹」
- ―「鉄幹」から「寛」へ 不遇な生涯と短歌への情熱 明新社 二〇〇六年二月

(四天王寺国際仏教大学客員教授)